

村上 雪美氏 今治繊維リソースセンター

「タオル縫製士養成所」指導者



村上雪美氏



モノづくりにおいて、後継者不足は全国の製造業に携わる中小企業の共通の問題である。ここ今治もそうであるが、今治タオル工業組合はタオルの仕上工程のひとつである縫製（ヘム縫い）の担い手を育成するために2023年7月、「タオル縫製士養成所」を開設した。ヘム縫いは、昔もいまも変わらず動力ミシンをつかって人の手で丁寧におこなわれている。このたび「タオルびと」でとり上げる村上雪美氏は、同養成所の初代指導者に抜擢され、将来の縫製技術者を育てている。

むらかみ・ゆきみ ☆ 1971年8月、越智郡波方町（現・今治市波方町）生まれ。1984年3月、波方町立波方小学校（現・今治市立波方小学校）を卒業後、1984年4月に今治市波方町共立北郷中学校（現・今治市立北郷中学校）へ入学。友だちの影響で音楽に目覚め、人生初のコンサートへ行く。中学卒業後、1987年4月に愛媛県立今治工業高等学校繊維科に入学し、タオルづくりの基礎を学ぶ。高校卒業後、1990年4月に家業の馬刀湯タオル（株）に就職。家族とともに馬刀湯タオルを大きくするが、大口取引先の突然の倒産によって大打撃を受ける。苦難の日々がつづくなか、両親のケガと病気、そして死に直面し、いったんタオルから離れるが、縁が重なり2023年3月に「タオル縫製士養成所」の初代指導者に就任。

1. 幼少年時代

タオル屋の娘

1971年8月、村上雪美氏は、今治市の最北端に位置する波方^{なみかた}町でタオル工場を営む両親のもとに長女として誕生した。上には2歳離れた兄がいる。父親は、波方町出身で1946年に7人兄弟の上から4番目の三男として生まれ、中学校卒業と同時に近藤繊維工業（株）（現・コンテックス（株））に入社した。同社で製織技術者としてキャリアを積み、製造課の主任を務めた。母親は、1944年福岡県^{くらて}鞍手郡で8人兄弟の上から5番目の四女として生まれた。近所に住む人が近藤繊維工業で働いており、その伝手で母親も来今して入社し、伸べ士（整経オペレーター）として技術を磨いた（コンテックスについては「タオルびと」2016年8月号～11月号を参照）。

母親は、幼い頃から美容に興味があり、その夢を叶えるべく、近藤繊維工業をいちど退社して上京し、芸能人のヘアメイクを担当するアーティストの助手として働いたことがある。この職で人生を送ろうかとおもっていた矢先に、父親から手紙が届いた。手紙には、「いまちょうど伸べ士が不足しているから今治に戻ってきてくれるか」と書かれていた。そして、今治で再会した二人は1968年に結ばれ、二人の子供を授かった。



波方の海で家族、親戚とともに

（右端が村上氏、右から2番目が兄の裕一氏）

両親の趣味は海釣りで、二人とも船舶の免許をもち、小型漁船を2艘所有していた。海釣りは両親の趣味であり、獲れた旬の魚介は

ほぼ毎日の膳に上り、大漁のときは近所に配ったり、取引先に分けたりしていた。

「雪美」という名前は、寒い冬に生まれたからではない。みずからも不思議におもい、ある日、母親に「私は、ひょっとしたら、本当はもっともっと立派なお家のお嬢様じゃなかったの？生まれたときに、病院で足首に名前をつけるの間違えられたりしてないよね？」と冗談を交えて聞くと、母親は「お盆休みに生まれたんは、あんた一人やった。他に赤ちゃんはいなかった」と一蹴。母親が亡くなりたいまとなっては、真夏生まれの赤ん坊になぜ「雪美」と名付けたのか、真相はわからないままである。

1978年4月、村上氏は波方町立波方小学校に入学した。波方町はかつて越智郡であったが、2005年に今治市となり、現在は今治市立波方小学校となっている。波方町は地理的に海の玄関口として海運業がたいへん栄えた地域であり、ここで育った村上氏はタオルとおなじくらい海と深い繋がりがある。




父親と3歳頃の村上氏

幼い頃の村上氏は、友だちのつくり方もわからないくらいおとなしかったが、年長になるにつれてよくしゃべる明るい子供に成長した。「勉強しなさい！」ではなく「挨拶をきちんとしなさい！」という両親だったので、勉強した記憶はあまりないが、学生時代は自由奔放に「楽に」生きてきた。

学校から帰ると、自宅から100mほど離れた両親の仕事場である、馬刀瀉^{まてがた}タオルの工場によく遊びに行き、工場で働いていた「大人たち」にかわいがってもらった。そんなこともあり、近所の人には村上氏のことを「タオル屋の娘」

と呼んだ。いまだに「雪美」という名前がピンとこない人もいるが、「タオル屋の娘よ！」と言うと、誰もが合点がいった。

学校が休みの日は必ず海に行った。自宅から50メートルほど離れたところに瀬戸内の海が広がり、「歩いたらすぐ海、庭みたいなものです。市街で暮らす人と違い、夏休みは着替えの服なんか準備して持って行かなくても、水着姿にビーチサンダルで泳ぎに行けます」というくらい、海は村上氏にとって生活の一部だった。

タオル工場が休みになる日曜日は、家族、そして父親が弟のように仲良くしていた「おいちゃん」の5人で海へ行った。村上氏は、兄と小さな貝を拾ったり、水溜まりにいる魚を捕まえたり、クラゲを投げあいこしたりした。父親たちが魚や瀬戸貝  やサザエを潜って採りに行っている頃、母親は魚飯あるいは貝飯のどちらかの下準備のために砂浜に打ち上がっている流木を集めて火を起こした。これが村上家の日曜日の恒例行事だった。



小学校3年生の頃、たくさん獲れたサザエと

二人乗りのゴムボートを初めて買ってもらったときは嬉しかった。ゴムボートを自宅の玄関に置き放しにして、時間さえあればゴムボートを海まで引っ張り夢中で遊んだ。しかしそのうち、「船やったらもっと遠くに行けるし、魚もいっぱい獲れるだろうな」とおもいはじめ、ゴム

ボートでは物足りなくなった。しまいには両親の所有する船に乗って釣りに行くのが、村上氏にとって極上の楽しみとなっていた。

平日でも潮回りがよければ、父親は船を出し、釣りに連れて行ってくれた。大潮の干潮時には、大きなタライをもって瀬戸貝やサザエを獲り、どれだけ獲れたか父親とよく競争したものである。村上

氏の幼少時の懐かしい思い出の数々は、家族とともに海と繋がっている。

人生初のコンサートで興奮


1984年4月、村上氏は今治市波方町共立北郷中学校（現・今治市立北郷中学校）に入学し、徒歩から自転車での通学が変わった。波方町と波止浜^{はしはま}の小学校区を併せた北郷中学校では学生数が増え、ずいぶん賑やかになった。村上氏によると、波方町から徒歩で20分くらいにある波止浜はより都会的だった。「当時は波止浜の学生と一緒にになるとおもっただけでドキドキしました。1年生のときは波方町出身の田舎者だからいじめられるんじゃないかとおもったくらいです。」

村上氏のそうした心配は杞憂に終わった。小学校とは違った新鮮さと多様性がそこにはあり、波止浜出身の友だちからはたくさんの「流行りもの」を教えてもらった。たとえば、音楽である。

音楽鑑賞はいつの間にか村上氏の趣味となり、テレビで歌番組が放送された翌日の教室ではその話題で盛り上がった。当時はレコードをカセットテープにダビングするのが流行っており、ラジカセ（ラジオカセットレコーダーの略）で音楽を聴く日々だった。毎日が音楽で溢れ、中学2年生ときに人生初のコンサートにも出かけた。

テレビで音楽番組をみていると、愛媛県内で開催される歌手やロックバンドのコンサート情報がCMで流れた。そのたびに「行きたい」という、込み上げる熱い衝動を抑えきれなかった。しかし、まだ中学生でお金がない。いろいろ考えた挙句、やはり母親にお願いするしかなく、「勉強がんばるから、お手伝いするから」と母親がトイレに行くときもつきまとい、調子のいいことを言って懇願した。その思いは中学2年生の夏休みに叶った。新居浜市で開催された野外コンサートに友だちと参加し、エントリーされていた中村あゆみ^{🗨️}やハウンド・ドッグ^{🗨️}のパフォーマンスに大興奮した。人生初の

コンサートは、村上氏の人生に残る体験のひとつとなった。そして、興奮冷めやらぬうちに翌年も松山市の県民文化会館で開催されたハウンド・ドッグのコンサートに出かけ、すっかりハウンド・ドッグの虜になった。

中学時代の思い出で、もうひとつ印象に残っている出来事がある。阪神タイガースの優勝で祝賀ムード冷めやらぬ京都、神戸、大阪に2泊3日の修学旅行で行った際、神社仏閣よりも異人館よりもたこ焼きよりも、大阪のマクドナルドで初めて飲んだシェイクに血が騒いだ。ジュースとも違うしアイスクリームとも違う食感に「これが噂のシェイクというやつか」と感激した。マクドナルドのシェイクの味は、楽しかった中学時代を思い出させてくれる青春の記憶である。移動中のバスのなかでは、当時流行していたC-C-B の「ロマンティックが止まらない」をクラスみんなで大合唱し、朝から晩まで大騒ぎの修学旅行だった。

都会的センスを身に纏った村上氏の中学校時代はあっという間に過ぎた。毎日の通学の足取りも軽く、「雪美ちゃん、競輪選手みたいに速く自転車を漕いで、そんなに急いで何かあるん？」と近所の人に言われたほど、自宅から学校までの道のりを猛スピードで駆け抜けた3年間だった。

さらに輪をかけて青春を謳歌した高校時代

村上氏は、中学を卒業後、1987年4月に愛媛県立今治工業高等学校繊維科に入学した。繊維科への入学は村上氏のなかではごく自然な選択であった。

高校生になると、さらに行動範囲が広がり、とにかく毎日が楽しかった。まず、一般教養を学ぶ授業だけでなく実習もあり、実践的な内容を習得できたことはたいへん勉強になった。当時、同校では機械科、電気科、工業化学科、繊維科、デザイン科の5学科があり、週に1回のペースで学科を跨いだ実習があったことも、貴重な学び

となった。

つぎに、繊維科の先生たちはとてもフレンドリーで、素のままの自分を出せる環境だった。学ぶ楽しさも教えてもらった。村上氏は、当時の先生たちの名前をすべて覚えており、いまでも付き合いがある。先生たちや友だちと一緒にいった東京方面への修学旅行も楽しい思い出である。流行に敏感だった村上氏は、国会議事堂や東京タワーといった観光名所の定番よりも、原宿の芸能人ショ



友だちとディズニーランドにて（右が村上氏）

ップに興味があり、所ジョージやビートたけし、おニャン子クラブの店に行ってみたり、クレープを食べてみたりしたかった。夢は叶った。1983年に開園したディズニーランドにも足を伸ばし、日本が誇るテーマパークを満喫した。

そして、時代はレコードからCD（コンパクト・ディスク）に変わりつつあったが、音楽好きにますます拍車がかかり、一年に3回ほどコンサートに出かけるようになった。たとえば、1987年12月31日から1988年1月1日の年越しイベント「ロックンロールバンドスタンド」は、札幌や新潟、名古屋、神戸、福岡の5つの会場で同時開催され、日本を代表するロックバンドや歌手が出演するとあって後日NHKでも放送された伝説のコンサートであり、村上氏はそのうちの福岡国際センターで開催されたコンサートに参加した。そこには、ブルー・ハーツやバービー・ボーイズ、レッド・ウォリアーズ、エコーズなどが出演していた。残念ながら、中学2年生の「あの日」からファンであるハウンド・ドッグは新潟会場でエントリーされていたため、直でみることはできなかったが、村上氏が学生時代にもっともよく行ったコンサートはハウンド・ドッグだった。

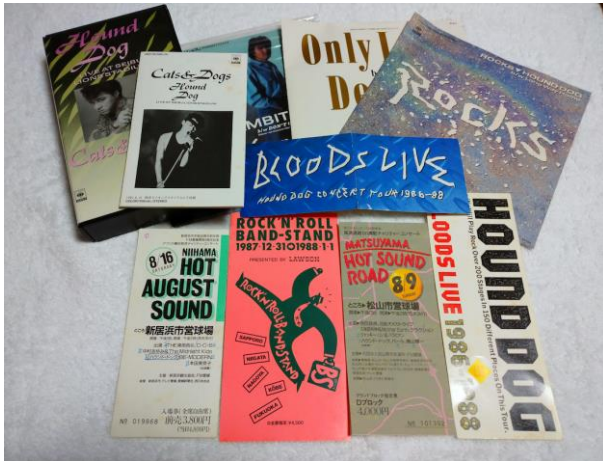
そのほかにも、ボン・ジョヴィ をはじめ、アメリカのロックバンドの音楽も高校生になってから聴くようになった。



体育祭のときにクラスで製作した応援ボード

村上氏にとって高校時代は学生生活でもっとも充実した時間だった。中学時代も楽しかったが、高校生になって行動の範囲が広がったことと、専門的な学びができたことは何よりの喜びであった。卒業後の進路については、先生や母親から大学への進学を薦められたが、家業の仕事を手伝うことしか頭になく、タオルを置いてほかに何か学ぶという選択肢はなかった。

卒業後の進路については、先生や母親から大学への進学を薦められたが、家業の仕事を手伝うことしか頭になく、タオルを置いてほかに何か学ぶという選択肢はなかった。



ハウンド・ドッグを筆頭に当時出かけたコンサートのチケットは大切に保管している

高校卒業後、村上氏は18歳で四輪自動車の免許を取得した。「カッコいい」車に乗って遊びに行くことを妄想していたが、間髪入れず母親が、「仕事用の車に先に乗る練習をしておかないと怖くて大きい車に乗れんよ。バンさえ乗れたら、軽自動車だろうと普通自動車だろうと何でも乗れるからね」と言われ、出鼻をくじかれた。村上氏の言う「カッコいい」車とは、1978年にデビューし5世代にわたり、とりわけ若者の間で人気だった本田技研工業（株）のプレリユ

の言う「カッコいい」車とは、1978年にデビューし5世代にわたり、とりわけ若者の間で人気だった本田技研工業（株）のプレリユ

ードのことである。

母親の言うことも一理あり、最初に乗ったのはトヨタ自動車のハイエースだった。さすがの母親である。「わたしのどんくさいのをよくわかっていましたね」と村上氏。その後、仕事をとおして運転の腕前を上げ、社会人になって初めて自分のために買った四輪自動車はトヨタ自動車のカローラレビンだった。村上家では「車はトヨタ」だったため、プレリュードに似ているという理由からカローラレビンを選んだ。村上氏にとって「カッコいい」車は、収納抜群のバンとは似ても似つかないスポーツカーだったのである。

（次号につづく）

